

女性医師のさらなる活躍を応援するシンポジウムについて

○ 本懇談会に関連して開催したシンポジウムの概況については、以下の通り。

1. 開催概要

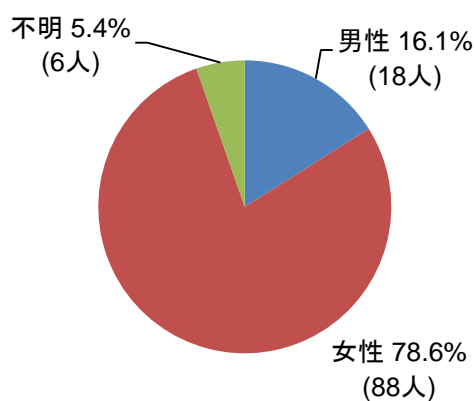
日時：平成 26 年 8 月 24 日（日） 14:00～16:00

場所：独立行政法人国立国際医療研究センター 研修センター 5 階大会議室

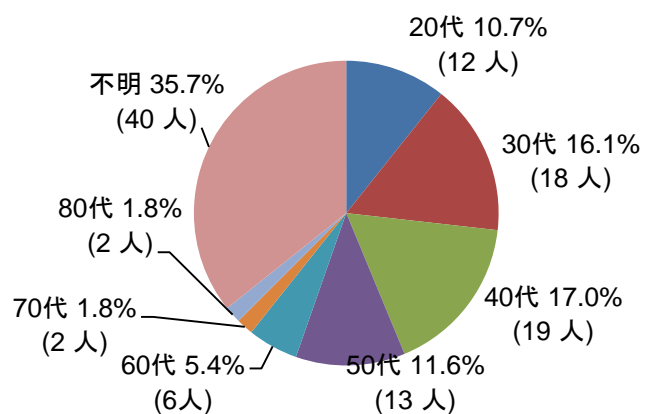
2. 参加者

総計：112名

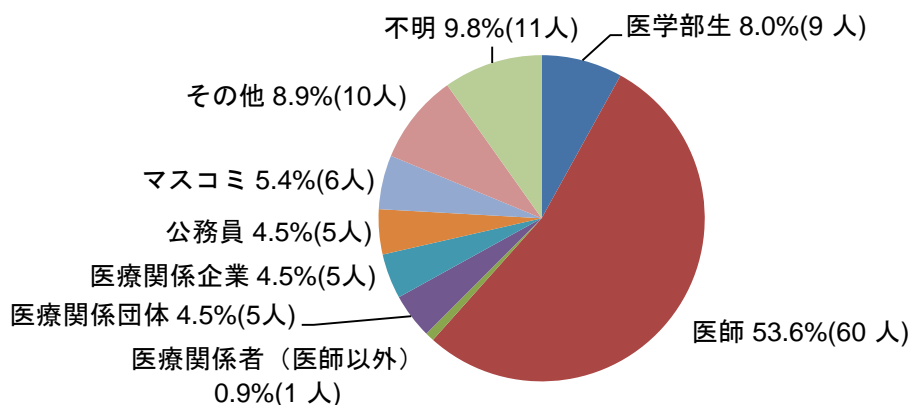
<性別>



<年齢>



<職業>



3. プログラム

第1部 基調講演

- ・懇談会構成員5名より発表
- ・自身のキャリアパス、出産、育児等のライフイベントを抱える女性医師としての視点を持つことで良い方向に影響したこと、今の仕事やキャリアに活かされていること等について紹介
- ・発表資料については参考資料3を参照

第2部 意見交換（参加者と懇談会構成員との意見交換）

主な意見は別紙1を参照

4. アンケート調査

- ・参加者にアンケートを配布し、78名より回答（回収率70.9%）
- ・「ライフイベント（出産、育児、介護等）を抱えながら仕事を続けたい場合、あなたの職場（将来の職場を含む）で課題と考えられることや望むこと」等の質問について、自由記載で回答
- ・主な回答内容は別紙2を参照

(別紙 1)

女性医師のさらなる活躍を応援するシンポジウム 意見交換における主な意見

1. 全体

(参加者)

- 通勤時間や保育園への入園のしやすさなど、地域によって環境が大きく異なり、個別にロールモデルや相談先を探すしかないのか。
- 病院見学に来る学生や研修医と話をする、今でも、男性は仕事、女性は子育てといったステレオタイプの価値観を持っていることがあり、昔と変わっていない状況に驚いている。

(構成員)

- 勤務環境や保育環境は地域によって様々であることから、地域の大学病院や中核病院が中心となりネットワークを作るなどして、地域性に応じた取組を展開してはどうか。
- 働き方や価値観は個人によって多様であることから、個別性をもった多様なロールモデルを提示していくことが重要。
- 女性医師の勤務環境の改善は、男性医師や全ての医療職の勤務環境につながるよう、男女が一緒になって取り組んでいくことが必要。

2. 勤務体制について

(参加者)

- 病院で短時間正規雇用制度を早期から導入し、好評を得ているが、一方で、当直や時間外勤務ができないだけで、フルタイムで働くことができる医師にまで、勤務時間を制限してしまうおそれがある。

3. 職場の理解について

(参加者)

- 管理者や上司は育児をしてこなかった男性が多く、育児をしながら働くことについて理解を得ることが難しく、周囲に相談できる人もいない状況が未だにある。
- 育児等をしながら働き続けることを前提とした評価制度が必要ではないか。

(構成員)

- 育児等をしながらキャリアを継続していく上では、職場の上司、同僚等の理解やサポートといったソフト面が重要。
- 女性医師が少なかった職場でも、これからは、一緒に働くことが当たり前という認識が必要。
- 男性医師にも、家事や育児への関与を勧め、支援していくことも必要ではないか。
- 以前と比べれば、全国の医学部長、病院長の女性医師の勤務環境についての認識も浸透し、院内保育所の設置が進んできている。
- 管理者の意識を変えるだけでなく、地域の医療提供体制をどのように作っていくかを考える中で、男女に関係なく取り組んでいくことが必要。

4. 本人の取組について

(参加者)

- 当直の免除等、職場の配慮に対して申し訳ないという気持ちが強く、感謝の気持ちを持つだけでよいのか。
- 職場の配慮を受け取るだけでなく、ベビーシッターなど外部のサービスの活用をもっと進めるなど、家事や育児の支援を受けることによって、医師としてのキャリアを積むべきではないか。
- 様々なロールモデルを紹介するシンポジウムを開催して DVD を作成したり、所属に関係なく参加でき、情報交換できるコミュニティを立ち上げたりしているので、それらを活用してもらいたい。

(構成員)

- 職場の配慮に対して当然の権利と思うのではなく、育児等をしながら働く医師と周囲のお互いの思いやりが重要。
- 支援を受けた後、将来は、次の世代に支援を提供する側に回ればよいと思う。
- 家族に対して、家事負担のかかることの多い女性医師がイニシアチブをとって、職場に近い場所に引っ越しするなど、働き続けやすい環境を積極的に作るということも考えてもよいのでは。
- 日本医師会において、全国にコーディネーターなど配置しているので活用してもらいたい。

5. 職場以外の取組について

(参加者)

- 学生の段階から、保育園や病児保育などの仕組みを教え、仕事と育児が両立できるという意識を持ってもらうことは重要。

(構成員)

- 学会や専門医の仕組みの中で、男女共同参画の教育を組み入れていくこともあるのではないか。

女性医師のさらなる活躍を応援するシンポジウム

アンケート結果概要

1. 職場全体にかかる課題

(1) 勤務形態や制度について

- ・時短勤務や業務のチーム内分散、複数主治医制にするなどの工夫が必要 (20代、医師他)
- ・長時間労働の解消が必要 (40代 医師他)
- ・長期休業時の給与補填などの経済的支援が必要 (40代、医師)
- ・時短勤務の常勤医と非常勤医の待遇の差があり、金銭的な補填が必要 (40代、医師)
- ・勤務時間内に会議を実施してほしい (50代、医師)

(2) 設備について

- ・院内保育 (病児・病後児保育を含む) の充実をしてほしい (20代、医学部生他)
- ・24時間保育や週数日の保育、大学院生は保育所の入園が難しい場合があるなど、運用上の充実をしてほしい (30代、医師他)

(3) 人員について

- ・周囲の負担増にならない人員配置や代替要因の確保などの工夫が必要 (20代 医学部生他)
- ・医師の業務を支援するメディカルクラーク等の充実が必要 (30代、医師)

2. 職場の理解にかかる課題

(1) 管理職・上司について

- ・独身の女性医師や後輩を含め、周囲に負担を増やさないような配慮が必要 (30代、医師他)
- ・職場におけるニーズや活用できる制度等を十分に把握してほしい (30代、医師他)
- ・仕事の緊急時にも、周囲に対応を頼むことができる雰囲気してほしい (20代、医学部生)
- ・上司自らが「帰りなさい」などの声かけをしてもらうことで帰宅しやすくなる (30代、医師)
- ・働き方について月単位、年単位で様々な選択肢を準備してほしい (30代、医師)
- ・必要な情報の提供や支援活動の紹介、先輩、後輩と情報交換する機会を提供してほしい (40代、医師)
- ・管理職に女性が少なく、理解を得ることが難しい (50代、医師)

(2) 同僚について

- ・男性医師への啓発が必要 (30代、医師他)
- ・男性医師の育休取得等、家事・育児の参加を進めることが必要 (40代 医師)

3. 本人自身の課題

- ・夫の支援やベビーシッターの活用など、自分の時間が確保できるような工夫が必要 (20代、医学部生)
- ・就業を続ける意欲、強い意志が必要 (30代、医師)
- ・育児中であっても、医師としての責任感が必要 (30代、医師)
- ・自身の状況や希望を早めに申告するなどの姿勢が必要 (30代、医師)
- ・若い世代は権利の主張が強く、責任や義務を果たす意識が少ない (50代、医師)

4. その他

- ・ 専門医の資格の取得、更新と出産・育児の両立はできるのか（20代、医学部生）
- ・ 仕事を中断しても、専門性を保っていけるのか。現場を離れることへの不安がある（20代、医学部生）
- ・ 出産、育児等のライフイベントを抱えても、それ以前と同様に扱って欲しい（20代、医学部生）
- ・ 研修病院など進路を決めていく上で、身近なところにロールモデルがほしい（20代、医学生）
- ・ 専門医の取得と育児の時期が重なると、専門医を取得しないまま離職につながってしまう（30代、医師）
- ・ 医学教育の上層部においてもキャリア形成に関する教育や理解の充実が必要（30代、医療関係者）
- ・ 介護を抱える医師の課題にも取り組んでほしい（40代、医師）
- ・ できる限り早い時期、医学部生の時代に様々な情報やロールモデルを見聞きすることで、将来役に立つ（50代、医師）
- ・ 男性医師への教育について、厚生労働省と文部科学省との連携が必要（50代、医師）
- ・ 論文数が評価される現状では、女性医師が指導的立場に就くことは難しい（50代、医師）
- ・ 民間のダイバーシティの課題と同様だが、管理職の意識改革に結びつくようなインセンティブが難しい（50代、医療関係企業）

5. シンポジウムへの感想

- ・ 自身のキャリアや将来のことを考える良い機会となった（20代、医学部生他）
- ・ 男性医師や独身女性医師の事例や問題意識も聞きたい（20代、医学部生他）
- ・ 成功事例だけではなく、うまくいかなかった事例や困難な状況を乗り越えた事例など、もっと身近な話題を取り上げてほしい（30代、医師他）
- ・ WEB会議で開催するなど全国から参加できるようにしてほしい（30代、医師）
- ・ もう少し若い世代の意見を聞きたかった（50代、医師）
- ・ 医師は不規則なスケジュールや夜勤が多いなど、一般の職業とは異なる医師の特殊性がよく理解できた。（20代、報道関係者）
- ・ この数十年で、育児中の女性医師も増えている。大事な仕事なので、地域の社会資源や外部サービスを利用するなどしてがんばってほしい。（60代、医療関係団体）